

松浦理英子『犬身』論（I）——先行作品考察

百瀬 奈津美 MOMOSE, Natsumi

はじめに

松浦理英子氏は、一九七八年に「葬儀の日」で第四十七回文壇新人賞を受賞し、その後現在に至るまで執筆活動が続ける小説家である。

本論文は、松浦氏が著作を通して描いてきた人間関係を持つ特徴と、松浦氏の持つ性愛観が人間関係の中でどう主張されているかを解明し、それが近著の『犬身』（朝日新聞社、二〇〇七年十月）においてどのような到達点に辿り着いたかを解明することを目的としている。

第一章 松浦氏のもつ性愛観

松浦氏は、世間一般に浸透する性器結合中心主義、男根主義を批判し、非性的で皮膚感覚的な快楽を主張している。

性器結合中心主義は、「結婚し子供を持つこと」が望ましいとされる社会の傾向に裏打ちされた、性行為の際に男女が性器を結合させることを重要視する主義である。男根主義は、男性が自分は男で男性器を持っているということにアイデンティティを感じ、それが自身の男性器への

愛着として現れることや、女性は社会的、身体的に男性よりも弱い立場にあり男性の性の対象でしかないと蔑視する姿勢をとることを言う。

松浦氏は、性器結合中心主義と男根主義を批判する理由を次のように述べている。

自分が性欲だと信じているものもしかしたらそうではないんじゃないか。誰かと親しくなり、その人に対して好意をもって近づいていきたいという衝動や欲求を感じる。この二人の人物が男女であったら、肉体的に性行為が可能だし、男女の間に生まれる親しさへの欲求が即ち恋愛感情や性的欲求であるという固定観念もあるしで、比較的簡単に性的な関係を結んで、性的なかたちで仲良くなりがちだと思うんです。同性愛の人たちの間でもそういうことはあるでしょう。しかし、この二人が、あるいは二人のうちの一方が、相手としかかったのは本当に性行為だったのか、実は別の親しさのかたちがあったんじゃないか、とふと疑問を抱く瞬間があるのではないかと考えるわけです。もしかしたら、時に違和感を感じながらも、

立ち止まらずに、一種の儀式、約束事のように性行為を行っている人もいると思うんです。別に性行為が悪いということはないけれども、果たして性行為によっていつもいつも私たちは本当に満たされるのか。私たち、現代に生きる人間は、あまりに安直に性行為に走っているという気がしてならないんですね。

(「犬的なるものに導かれて」)

好意的な関係を持つことと性的な関係を持つことは必ずしも一致するものではない。にもかかわらず、性器結合中心主義が主流である社会では、恋愛や結婚と性行為は切り離せないものとなっている。松浦氏は、「生殖のための性器結合」が特権化されたことよって、性行為の際に性器結合をしなければ済まなくなり、性器の快楽を求めるようになった性行為の在り方と、関係性を作る際に性的なものを過剰に重視する傾向に批判的である。(性行為そのものを否定しているのではない。)男根主義の批判は、性器結合中心主義的な性行為の中で男性が自身の男性器への愛着を深めようとする行為に対する批判であり、それに付随して女性蔑視を行うことへの批判も含んでいる。

松浦氏がより親密な人間関係を築く際に安易に性行為に走ることに疑問を持つ理由として、松浦氏が性行為以外のコミュニケーションの手段として非性的で皮膚感覚的な快楽によるコミュニケーションを支持していることが考えられる。非性的とは、「精神的な快楽」や「かならずしも性行為に結びつかない、性的な欲望にみちびかれて起こるわけではない、好きな人と軽くスキンシップすれば非常に気持ちがいいというような皮膚感覚的な快楽」(「文学とセクシュアリティ」)と言う、性器を介在させることなく快楽を得ることである。皮膚感覚的な快楽とは、

皮膚と皮膚の触れ合いにより得ることのできる「好きな人と軽くスキンシップすれば非常に気持ちがいい」と言う快楽や親密さを指す。皮膚感覚的な快楽は性行為を志向せず、触れ合いによるコミュニケーションで親密さを増すことを目的としている。そのため、性行為によって親密さを増すことを志向する性器結合中心主義はそぐわない。

以上から、松浦氏の性愛観は、性器を重要視しない非性的で皮膚感覚的な快楽こそが人間関係の構築において力を持つと考えるものであると言える。そして、松浦氏の性愛観では、性行為を中心とする性器結合中心主義と、性器結合中心主義に依拠するところのある男根主義は批判され排除される。

第二章 先行作品分析

この章では、本論の主眼となる『犬身』に描かれる人間関係と性愛観を考察する前段階として、松浦氏の先行作品においてどのような人間関係を性愛観が描かれてきたのかを考察したい。(本論文では、『犬身』までに発表された松浦氏の小説群を「先行作品」と呼ぶことにする。)

第一節 「葬儀の日」(『文學界』一九七八年十二月)

「葬儀の日」は、「泣き屋」という職業につく「私」とその「片割れ」である「笑い屋」との交流を描いた作品である。「片割れ」とは「葬儀の日」に登場する人物の誰しもが持っているものだ。「私」を含む作品内の人々は生まれながらに「欠如感覚」を抱えており、「片割れ」はその欠如した部分を埋めることのできる存在である。

「私」以外の人々は「片割れ」と出会って欠如感覚が埋められることを肯定してはいるが、早々に「片割れ」と交流することを放棄する。相手が存在していることに自覚的であっても、交流はせず適度な距離を置

くのが良いとしている。それに反して「私」は、「片割れ」である「笑い屋」との交流を絶とうとはしない。一般的な泣き屋たちが「片割れ」によつて完全に欠如感覚を埋めて生きるのは望ましくないと思っているのに対し、「私」は「片割れ」と癒着し欠如感覚を埋めることが望ましいと考えている。

「私」と「笑い屋」は、「片割れ」との関係が川の岸に喩えられている。両岸としての二人が存在することで川という『関係性』が構築されると言う。「私」以外の泣き屋たちは「片割れ」の存在を認めつつも川という適度な距離を置くことで、個別の自己を保ちつつ欠如の埋められた関係を結んでいる。しかし「私」と「笑い屋」はそうした関係を拒み、「自らの体である土を少しづつ切り取り崩して行つて、水の中に侵入し、対岸に達しよう」とした。適度な距離を置いて欠如を埋める関係ではなく、自分と相手との距離を詰めて境界線を曖昧にし、結合することを望んでいるのである。「私」と「笑い屋」の関係は、欠如感覚を埋めるために互いの間にある距離を埋めきり、結合することを望み合う関係である。

この二者関係との対比として、「私」と「私」に好意を持つ「少年」との二者関係が描かれる。「少年」は性行為(男女の結合)という形で「私」と結合しようと試みるが、「私」は「少年」が欠如感覚を埋め均衡を保つために結合する相手として自分を求めていることと、欠如感覚を埋めるために自分と「笑い屋」が結合を求めていることを対比し、「自分の片割れ」と結合することを選ぶ。

「葬儀の日」では、人が自身の抱える欠如感覚を埋めるために他者を求める様子が描かれている。その手段の一つは、肉体的に結合して所有し合うこと(性器結合中心主義)であり、もう一つは肉体を媒介とせず時間にかかることで両者の間にある距離を埋めて結合をはかることであ

る。この二者関係は対比され、「私」は性的な結合を否定して後者を選ぶ。「葬儀の日」では、構築した二つの二者関係は対比され、自身の求める人間関係が選択されている。

第二節 「乾く夏」(『文學界』一九七九年十月)

「乾く夏」は、心中を象徴に他人と強い結びつきを得ることを熱望する彩子をキーパーソンにして、主人公の幾子と彩子の二者関係と、そこに彩子の元恋人・悠志を引き入れることで構築される三者関係を描いた作品である。

彩子の持つ心中願望は相手との一体化を望むものであり、幾子はその願望を理解し共有している。しかし、どんなに心を相手に向かって全開し精神的に一体化することができても、同性である幾子と彩子は肉体的な一体化は実現できない。幾子と彩子は、精神と肉体の一体化を望む二者関係である。ここで、二人を繋ぐ媒介として登場するのが悠志である。幾子は彩子と性的関係を重ねた悠志と情交を図ることで、悠志に対して「肉体関係を通して一体化する相手」という立場で彩子と自身を同一化させ、間接的に彩子と肉体的に一体化をする可能性を見出す。しかし、幾子は悠志との性行為に失敗し、彩子と自分が個別の存在であることを痛感する。悠志の介在によつて幾子と彩子の間の肉体的な一体化は不可能であることが証明されたことで、幾子と彩子の関係は肉体的な一体化も心中も必要としない新たな関係へと移行する。

以上から、「乾く夏」に描かれる人間関係には次のことが言える。まず幾子と彩子からなる二者関係は、一体化への強い思いで結びついている。とても緊密な間柄であるが、二人は「身も心も相手に向かって全開して、相手と混ざり合い一体」となることはできない。ここで、二人の関係は悠志を含む三者関係へと発展する。この三者関係では、精神的・肉体的

な結合を求める二人（幾子と彩子）の間に一体化の不可能性を示す装置（悠志）が介在することで、二人の関係に何らかの変化がもたらされる。「乾く夏」に描かれるのは、三者関係の一角を媒介に残る二つの角が新しい関係を得る構図であると考えられる。

第三節 「肥満体恐怖症」（『文學界』一九八〇年六月）

「肥満体恐怖症」は、幼い頃に母親を傷つけたまま死なせてしまった後悔を抱える唯子が、その悔恨から目をそらすために母親を傷つける原因となった「肥満を憎む気持ち」を持ち続けながら、肥満体である水木たちと接することで自己完結的に憎しみを継続させる姿勢を糾弾される物語である。

肥満体恐怖症を抱える唯子とその原因となった母親、そして肥満体の代表として唯子を糾弾する水木の三人は、唯子の抱える肥満体恐怖症で繋がった三者関係である。まず、前提として唯子と母親の二者関係が存在する。母親との関係に悔恨のある唯子はその逃避のために肥満体恐怖症という病を作り上げ、母親との二者関係に水木たち肥満体の女性を引き入れ嫌悪することを通して、母親の肥満に対して持った嫌悪を正当化させる三者関係を構築しようとした。しかし水木は自分たちが憎しみを増幅させるための装置として使われることを許さず、唯子を追及する。唯子は媒介であったはずの水木から働きかけられることで、自身の変化を予感し、肥満体恐怖症を抱え続けたことの許しを乞う。これは、引き入れられた第三者によって前提となる二者関係が変化することを意味する。

以上から、「肥満体恐怖症」に描かれる人間関係は、最初にある二者関係を、第三者の介在によって深化または変化させようとする関係であると考えられる。

第四節 『セバスタン』』（『文學界』一九八二年二月）

『セバスタン』は、マゾヒストの麻希子を「奴隷」、その同級生の背理を「主人」とした、「主人と奴隷」「ごっこ」と称されるSM的な二者関係を描いた作品である。麻希子は自他の性別に関心がなく、自身を「物」として考える人物であり、背理から邪慳にされ屈辱を受けることに快楽を覚えている。二者の間には恋愛感情や性的感情が介在しない。

『セバスタン』では、性愛の介在しない、主従関係と言える人間関係が描かれている。この二者関係では主従関係だけが機能し、性的関係はおろか皮膚感覚的な快楽も機能していない。この主従関係は背理が「妊娠」という変化を迎えることで破綻した。二者関係は、一方が変化を迎えることで均衡を崩し、瓦解する。

第五節 『ナチュラル・ウーマン』（トレヴィル、一九八七年二月）

『ナチュラル・ウーマン』は「いちばん長い午後」「微熱休暇」「ナチュラル・ウーマン」の三作品によって構成された短編集である。この三作品は主人公・容子と三人の女性との関係を描いたものであり、作品を時系列順に並べた上で大まかな話の流れ追うと次のようになる。大学生時代の容子は花世と激しい恋に落ちるが、やがてすれ違いから破局を迎えてしまう（「ナチュラル・ウーマン」）。花世と別れた容子は、四年後には夕記子と性的関係を持つようになっていくが、花世との関係のような激しさはなく又破局を迎えようとしている（「いちばん長い午後」）。その後夕記子と別れた容子は、恋心を寄せている由梨子と海へ旅行する。容子是由梨子と恋仲になることを望むが性的関係を持つことは考えられず、それまでの自分では考えられなかった意識の変化に苦悩する（「微熱休暇」）。以上が、三作品を通しての物語の展開である。

ここでは、各作品における人間関係について考察する。なお、作品は

時系列順に並び替えて考察する。

五-1ノ「ナチュラル・ウーマン」(『ナチュラル・ウーマン』前掲)

「ナチュラル・ウーマン」には、大学生の容子と花世が漫画サークルで出会い、恋に落ち、破局するまでが描かれている。容子は自分の性についての意識は希薄だが、快楽を得ることは積極的な人物である。容子は恋人の花世と触れ合うことに大きな感動(皮膚感覚的な快楽)を感じ、そのことを特別視している。また、二人の性行為では女性器が使用されることはなく、皮膚の触れ合いや肛門での性的行為によって快楽が得られている。性器不在の性行為の成立が描かれることから、松浦氏の主張する「性器結合中心主義」への疑義と、皮膚感覚的な快楽の主張を読み取ることができる。

こうした関係を築く一方で容子は、皮膚感覚的な快楽を得ることのできる気に入った相手とならば誰でもあっても触れ合いをする、快楽に積極的な面を持つ。この様な容子の行動は花世の反発を買う。花世の不満を理解することの出来なかった容子は花世と別れざるを得なくなる。

五-2ノ「いちばん長い午後」(『文藝』一九八五年五月)

「いちばん長い午後」には、容子と夕記子の関係が描かれている。「いちばん長い午後」の容子は二十五歳になっており、商業誌で連載漫画の仕事をしている。容子は夕記子とS M的な性的関係を持つているが、「激しい行為があつても夕記子と私の熱情は沸点に達することはない、最近の彼女のことばを借りれば私たちは「かわいそうなカンケイ」しか持てない」、恋人関係とは言えない間柄である。

「いちばん長い午後」は、容子の二つの恋の中間の時期を描いたものである。そのためか、中心に据えられた夕記子との関係は、容子が自身について考えるためのものであると言える。夕記子との関係を通し、

容子は自分の欲求の在り方が、相手が自分の欲求を叶えてくれるように誘導し、その結果に快楽を得る形であることに自覚的になった。また、相手に恋情を抱く際の沸点も自覚している。この自覚を持つて、容子は好意を向けている由梨子との関係の形成に臨む。

五-3ノ「微熱休暇」(『文藝』一九八五年五月)

「微熱休暇」では更に時が進み、容子は夕記子とも別れている。容子は好意を寄せる由梨子と共に海へと二泊三日の旅行に訪れており、その一夜のことが描かれている。「気取りがなく、裏表がなく、鬱屈とは無縁」な性格の由梨子に友人として好意を抱いていた容子であったが、その感情は次第に恋へと変化してきていた。

容子は「由梨子を知る前の私は欲望や情熱に身を任せることに何の疑問も抱いていなかった。あらゆる欲望を実現し、理屈をつけて行為を避けようとする者がいれば軽蔑し」てきた。「欲望や情熱に身を任せることに何の疑問も抱いていなかった」というのは、快楽を得る相手を花世に限定せず、好ましいと思う相手とは躊躇なく触れ合ってきたことを指すのだろう。自身の欲求を満たすことは当然のことであり、それを抑圧することは考えられない。しかし、由梨子に出会ってからの容子は、由梨子に対してそのような欲求を抱くことができずにいる。

由梨子との関係を考える時、容子は花世や夕記子との間にあった出来事や、自分の今の行動を彼女たちならばどう評価するかということを通して考えられている。このことから、容子は由梨子との関係を形成する際に、花世・夕記子との関係や彼女たちの視点を第三者の位置に置いていると考えられる。花世と夕記子は容子がそれまで知ることのなかった容子の一面や快楽への姿勢を気づかせた存在であり、容子という人間を形成することにも一役買っている。容子と由梨子の関係は、容子が花世

・夕記子と関わるなかで形成してきた自身の性への自覚を下敷きに、新たな関係の構築を試みる関係であると考えられる。

五—4ノ「ナチュラル・ウーマン」まとめ

「ナチュラル・ウーマン」「いちばん長い午後」「微熱休暇」を通しての容子のパーソナリティと、三人の女性との関係の変遷をまとめる。

容子は自身の欲求を自身の望む形で満たすことに積極的な人物である。「欲望や情熱に身を任せることに何の疑問も抱かないために、花世という決まった恋人に限らずに快楽を得られる接触に積極的である。こうした関係は容子が他者に触れられたいと望み、相手に誘いかけることで成立する。そのため、相手は容子の誘いに乗って主導権を持つて容子に触れるものの、実の所は主導権を握っている容子の欲求を満たすために利用されている状態である。

こうした容子の振る舞いは、容子の感性を理解することができない花世との間に差異を生み、断絶を深くしていく。夕記子との関係も同様である。自分の欲求から生じた破局を二度経験した容子は、次の由梨子との関係に性的交渉を持ち込むことにためらいを覚える。由梨子との関係を良好に保ちたいと思う容子は、今までのように自身の欲望に忠実なだけではいられなくなり、由梨子との関係について考察を重ねなければならなくなった。

以上から、『ナチュラル・ウーマン』を通して描かれた三つの人間関係は、花世、由記子との二者関係を通して容子が自身の欲求の在り方に気づき、由梨子との二者関係に花世・由記子を引き入れた三者関係の中で、欲求を通して他者と関係を築く際の姿勢を変化させていくという過程を描いたものであると考えられる。

第六節 『親指Pの修業時代』（『文藝』一九九一年夏季号、一九九三年冬季号）

『親指Pの修業時代』の主人公・一実は、突然右足の親指が男性器に変化してしまった女性だ。親指ペニスは厳密には男性器ではなく、周囲からの刺激を受けて快楽を得るだけの器官である。

一実は親指ペニスができたことによって性愛への意識が変化し、親指ペニスに関わる人々との交流を通して、それまで抱いていた異性愛や性器結合中心主義が通説である「周囲から受け取った情報をもとに作り上げた性愛観」を見直し、新たな考え方を得ていく。

作品内で一実は様々な性愛観を持った人物と交流する。その中から、一実と性愛関係を持つ三人の人物との二者関係を取り上げ、『親指Pの修業時代』に描かれる人間関係の特徴と、性愛観の主張について考察する。

一人目は、一実の最初の恋人である正夫だ。正夫との二者関係には、男根主義と性器結合中心主義への批判が描かれている。一実と正夫は大学卒業後に結婚を約束する仲だったが、一実に親指ペニスができたことで関係が変化する。男根主義者である正夫が、一実の親指ペニスを激しく嫌悪する一方で自身の男性器には愛着を持ち、その愛着を満たすために一実に男性器への性的行為を要求したためである。一実は正夫の男根主義に嫌悪感を抱き、ついには破局することとなる。親指ペニスはそれまで一実が気づくことのなかった物事を明るみに出し、一実にそれらの物事との対峙を迫る。

二人目の恋人の春志との関係は、性器結合を目的としない皮膚感覚的な快楽による性行為の可能性を描いたものである。春志は性的な行為を行うことで相手と仲よくなることができると信じている、皮膚感覚的な交流を重視する人物である。春志との性行為は触れ合いを中心としたものであり、性器の結合はまったく重視されず、行われぬこともある。

一実は性器結合中心主義的な正夫の性行為と、皮膚感覚的な快楽を重視

する春志の性行為を比較した上で、自分は春志の流儀を気に入っていると判断している。この二者関係では性器結合中心主義と皮膚感覚的な快楽が対比されている。

三人目の映子と一実は同性愛関係を構築する。この二者関係では、性別に囚われない関係を通し、社会が形作った性愛のイメージに囚われずに恋愛し性行為を行うことへの可能性が描かれている。一実は映子との性的関係を経ることで、今まで構築してきた異性と恋愛をし、異性と性行為を行うという一般的なイメージから解放され、新たな感受性を手に入れた。映子との関係は、一実がそれまで持っていた、マス・メディアや友人から受け取った情報で構築していた性愛観を打ち壊し、イメージに囚われず自身の「官能的欲望に導かれて」皮膚感覚的な性行為を行うことを学ばせたのである。しかし、一実が新しい性愛観を得たのに対し、映子は性行為を中心主義的性愛にとらわれたままであり、性行為では親指ペニスと結合することを重視している。一実は再び直面した性器結合中心主義への比較として春志との皮膚感覚的な性行為を置き、皮膚感覚的な性行為を選んでいる。

以上から、『親指Pの修業時代』に描かれる人間関係は、一実が構築した二者関係を次々に対比していくことで性愛についての考えを深めることから、二者関係は性愛についての考えを深める場としての機能を持っていると考えられる。また、性愛観では、男根主義と性器結合中心主義への批判が描かれ、それと対比させるように皮膚感覚的な快楽が主張されている。

第七節 『裏ヴァージョン』(『ちくま』一九九九年二月～二〇〇〇年七月)

『裏ヴァージョン』の全文は、登場人物の昌子と鈴子の二人がフロッピー・ディスク上でやりとりした文章のみで構成されている。二人は四

十歳で、作家デビューするも鳴かず飛ばずのまま作家の道をドロップアウトした昌子が、一人暮らしの鈴子の家に居候をしている関係である。

二人の生活サイクルは全く重ならず家で顔を合わせることもない。唯一の交流の場はフロッピー・ディスク上である。昌子は鈴子の家に住む家賃代わりとして、毎月一本短編小説を書き、フロッピー・ディスクに収めて鈴子に渡す。鈴子が小説を読みコメントをつけることで、二人の交流は成立している。フロッピー・ディスク上の交流は陰悪なものだ。鈴子の書くコメント(作中で鈴子の発言はゴシック体で表記されているため、本論文でもそれにならう)は小説内容を批判する辛辣なものであり、対する昌子は鈴子を挑発するような内容の小説を執筆する。二人は小説とコメントの他に相手に対する(質問状)や(詰問状)もやりとりし、フロッピー・ディスク上での闘争を激化させていく。

昌子と鈴子の二者関係は、徹頭徹尾言葉による交流によって構築されている。二人は「世間一般の親友同士はもちろん、恋人同士よりも深い交わり」を持っているが、互いに恋愛感情も性的感情も持っていない「性行為抜きのための友達」だ。性的関係が不在の二人は触れ合うことはなく、ひたすらフロッピー・ディスク上での言葉の応酬で互いを刺激し合っている。この言葉の応酬は「ゲーム」と称される、昌子と鈴子が高校時代に行っていた娯楽としての喧嘩である。「ゲーム」は互いの距離を埋めるために、親しかった高校時代と同じ交流の仕方でも歩み寄ろうとして始めたものであると考えられる。しかし、大人になった二人は変化を迎えており、高校時代のような関係を構築することはできなくなっていた。変化した相手を理解するために言葉の応酬を続ける二人だったが、互いに変化した相手を受け入れることができない。言葉による交流は、相手を理解するには不足しているのである。

以上から、『裏ヴァージョン』に描かれる二者関係は、言葉による相互理解の困難さを描いていると考えられる。ここでは皮膚感覚的な交流は不在であり、二者間には性的関係は存在しない。

第八節 先行作品のまとめ

以上、『犬身』以前の松浦作品に対する考察を行った。ここで作品ごとに考察した人間関係の描かれ方と性愛観について確認し、松浦作品における人間関係の描写がどのような変遷を辿ってきたかをまとめる。最初に、各作品についてまとめた人間関係を列挙する。

「葬儀の日」

……構築した二つの二者関係を対比し、自身の求める人間関係を選択する構図。

「乾く夏」

……三角関係の一角を媒介に残る二つの角が新しい関係を得る構図。

「肥満体恐怖症」

……最初にある二者関係を、第三者の介在によって深化または変化させようとする関係。

「セバスチャン」

……性愛の介在しない、主従関係と言える人間関係。一方の変化によって関係は瓦解する。

「ナチュラル・ウーマン」

……描かれた三つの人間関係は、容子が自身の欲求の在り方に気づき、欲求を通して他者と関係を築く際の姿勢を変化させていく過程。

「親指Pの修業時代」

……男根主義と性器結合中心主義への批判と、皮膚感覚的な快楽の主張が描かれていると言える。また、二者関係は性愛についての考えを深める場としての機能を持っている。

『裏ヴァージョン』

……言葉による相互理解の困難さを描いている。この時、二者間には性的関係は存在しない。

「乾く夏」「肥満体恐怖症」の三作品では、前提となる二者関係があり、そこに第三者が関わることで前にあった二者関係の結びつきが強化される、関係に変化がもたらされるといふ人間関係が共通して描かれている。二者関係に三人目が加わる時、三人目は前提としてある二者の間では行うことのできない関係を持ち込む。例えば「乾く夏」では、男女の性愛関係が持ち込まれる。ここでは、三角関係は二者関係をさらに深化させるための装置として機能している。

「葬儀の日」「ナチュラル・ウーマン」「親指Pの修業時代」においては、構築した複数の二者関係を対比することで自身の欲求に対する考察を深め、選び取っていることから、二者関係は主人公が人間関係や性愛に対する思考を深める場として機能していると言える。

『セバスチャン』『裏ヴァージョン』では、性的関係を伴わない二者関係が描かれている。ここで二者を繋ぐのは精神的なSMの力関係や言葉の応酬であり、松浦氏の主張する皮膚感覚的な交流は不在である。どちらの作品でも、二者関係はそれを構築する人間が変化を迎え、それに対応しきれないことで瓦解を迎えている。

以上から、松浦氏の先行作品には次のような要素がある。

描かれる二者関係、三者関係は特定の人間関係や性的関係について考

察するための場となっている。前提として主人公の構築する二者関係があり、この二者関係を変化または深化させるために新たな人間関係が構築される。新たな人間関係の構築には二つのパターンがある。一つ目は、前提となる二者関係では行うことの出来ない行為を補完するために三人目の人物を引き入れ、主人公と三人目の人物との間で構築された関係から得られたものを前提となる二者関係にフィードバックしていくというものである。二つ目は、複数の二者関係を構築し、それらを対比することとで自身の持つ性愛観を深めていくというものである。松浦氏の描く人間関係には、この二つのパターンがあると考えられる。

また補足として、二者関係を構築する人物がその関係の外で変化を迎えた場合、その変化に対応できない二者関係は瓦解する傾向があることが挙げられる。この時の二者関係は性的関係も皮膚感覚的な関係も含まないものである。

つづいて、性愛観の描写について考察する。松浦氏は「性器結合中心主義」や「男根主義」への批判と、「皮膚感覚的な快楽」の主張を、作中の登場人物や人間関係を通して描写してきた。性愛観の描写は、登場人物に付されたセクシュアリティを通して主張されていると考えられる。作品ごとの登場人物に付された性愛に対する姿勢やセクシュアリティは、性愛観の主張をする上でどのような働きをしているのかをまとめる。

「葬儀の日」「乾く夏」「肥満体恐怖症」では、関係性の描写が主であり、登場人物に付された性愛観やセクシュアリティはまだ大きな機能を見せていない。「肥満体恐怖症」は性愛について言及した作品ではなく、「葬儀の日」「乾く夏」での性的関係は二者関係を深めるためのツールでしかないためである。登場人物に付されたセクシュアリティが機能するのは、『セバスチャン』からであると言える。『裏ヴァージョン』ではあ

えて性的関係を排除し、言葉による理解の困難さを描いていると考え、ここでは除外している。)

『セバスチャン』の主人公である麻希子はジェンダーにアイデンティティを求めない人物だ。「物の方に感情移入」し、自分に付属する生殖器さえも物化している麻希子は、性器に不随する性的欲求から遠い人物として描かれている。

『ナチュラル・ウーマン』の主人公である容子もまた、自身の性に関心を持っていない。容子が恋愛関係を持つのは女性のみであり、性器結合は不可能である。花世との関係では、性器を全く無視し、性器不在でも性行為が成立することが描かれた。性器不在の性行為の描写は、性器結合中心主義への批判である。また、容子が花世と触れ合うことに大きな喜びや快楽を感じる描写は、皮膚感覚的な快楽を描くものである。

『親指Pの修業時代』の主人公である一実は右足の親指が男性器になるという特異な状況を通して人間関係を築くことで、性愛について考察を重ねていく人物である。一実は親指ペニスによってそれまで当たり前のように信じてきた性の通念を打ち壊される。親指ペニスによって打ち壊されるのは、男根主義と異性愛主義、そして性器結合中心主義である。また、一実と恋人である春志の関係は、皮膚感覚的な快楽を媒介に恋愛関係を深化させるものである。

以上から、先行作品における登場人物に付された性愛に対する姿勢やセクシュアリティは、性愛観の主張をする上で次のように機能していると考えられる。

登場人物に付された性愛観やセクシュアリティが機能するようになる『セバスチャン』以降の主人公は皆、自身の性別や、性行為に対しての思い入れが希薄であり、同時に相手の性への認識も曖昧であるという

性愛への姿勢を持っている。性（性器）に関心がないことから男性器に過剰な意味を見出す男根主義には該当せず、性行為への思い入れが希薄なことから性器結合中心主義からは除外される。松浦氏の著作の登場人物はあらかじめ、松浦氏の批判する主義からは除外されているのである。その上で登場人物達に付される性愛観やセクシュアリティは、男根主義と性器結合中心主義を批判する機能を持っている。『親指Pの修業時代』において、生殖を行うことができず男性器にまつわる社会的通念とは無縁である親指ペニス（男根主義の批判のために機能している。また、『ナチュラル・ウーマン』の容子と『親指Pの修業時代』の一実）に付された同性愛というセクシュアリティは、異性愛中心主義を否定し、性器結合を介さない性行為を通して性器結合中心主義を批判している。その上で、容子と一実は皮膚感覚的な快楽を希求する性愛観を持つ、皮膚感覚的な快楽主義者というセクシュアリティを持ち、皮膚感覚的な快楽の可能性を体現していく。

男根主義と性器結合中心主義から除外された登場人物たちは、男根主義と性器結合中心主義、異性愛主義を批判していく。そして、皮膚感覚的な快楽と出会い、その可能性を体現していくのである。松浦氏の性愛観は、登場人物に付されたセクシュアリティを通して主張されている。

以上が、松浦氏の先行作品における人間関係の構造と、性愛観の描写に関するまとめである。続稿では、近著である『犬身』において人間関係と性愛観の描写がどのような地点に到達しているかを考察したい。

(つづく)

*引用・参考文献

- 〈松浦理英子氏の著作〉……本文の引用は文庫版から行った。
- 『葬儀の日』（河出書房新社、一九九三年一月）
- 『セバスチャン』（河出書房新社、一九九二年七月）
- 『ナチュラル・ウーマン』（河出書房新社、一九九一年十月）
- 『親指Pの修業時代（上・下）』（河出書房新社、一九九五年九月）
- 『ボケット・フェティッシュ』（白水社、一九九四年五月）
- 『オカルトお味定食』（河出書房新社、一九九四年八月）＊笹野頼子氏と共著
- 『優しい去勢のために』（筑摩書房、一九九四年九月）
- 『おぼれる人生相談』（角川書店、一九九八年十二月）
- 『裏ヴァージョン』（筑摩書房、二〇〇七年十一月）
- 『犬身』（朝日新聞社、二〇〇七年十月）
- （文庫版）
- 『葬儀の日―初期作品集1』（河出書房新社、一九九三年一月）。
- 『セバスチャン』（河出書房新社、一九九二年七月）
- 『ナチュラル・ウーマン』（河出書房新社、一九九一年十月）
- 『親指Pの修業時代（上・下）』（河出書房新社、一九九五年九月）
- 『裏ヴァージョン』（文藝春秋、二〇〇七年十一月）
- 『犬身』（朝日新聞社、二〇一〇年九月）
- （対談・エッセイ）
- 松浦理英子・星野智幸「対談 犬的なもの」に導かれて」
 （『小説 trigger』二〇〇七年冬・季号）
- 松浦理英子「文学とセクシュアリティ」『早稲田文学』一九九四年三月）
- 〈その他〉
- 橋爪大三郎『性愛論』（岩波書店、一九九五年二月）
- 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子『日本のフェミニズム6 セクシュアリティ』（岩波書店、一九九五年二月）
- 竹村和子『愛について——アイデンティティと欲望の政治学——』（岩波書店、二〇〇二年十月）
- 大橋洋一編『現代批評理論のすべて』（新書館、二〇〇六年三月）